新編水滸畫傳

初編

九

ヘ21
875
9

門へ遠
號 875
巻 9

新編水滸畫傳卷之九

東都　曲亭主人編譯

○林教頭刺配滄州道へ配する

高太尉ハ衆多の軍校をもつて既ゐ林冲を拿下させ忽地これを斬らんとせ〜うば林冲声をあらゝ立て。これ寃屈ゐハ死ゐどゝ叫び紙ゐ。高俅冷笑ふ。汝節堂よりうゝ何ゐをうたうぞ。且ゐよ剣を拿著て下官を殺さんとせかく事發覺ゐゐ。なほあらゞふやと罵ゐハ林冲又いふ。太尉の怒ひゐふ。なゞて這里へハ来るべき。疑ふ〜ハ両箇の承局を呼ひ。林冲を賺し来わる縁故を尋ゐへ。といわせもあへず。高俅一声高く喝ひ。やをれ林冲ゆ府の中ゐハ。さる承局なし。這厮罪ゐ服さゞを

断遣てこそあれといきまき紀充右をはじめて開封府に解去。滕府尹に分付て好生推問し。勘理明白なるに到てこそ首を刎させよと命されバ幹人鈞旨を領了て。彼宝剣を封じ。これを拿もて林冲を監押し。開封府を投て到了しが。府尹ハ衙にありていまだ退ず。只見る這ハ提轄官ハ機密を掌り。客帳司ハ牌單を管り。吏兵ハ藤條を執て階前に立。節級ハ大杖を持て左右に分る。詞訟を断るときハ。玉衡の明なるがごとく。是非を判く処ハ金鏡の照すに似たりかくて高太尉の幹人ハ。林冲を把て階前に跪き。高俅がいふところを舒述して。彼宝剣を上れバ。滕府尹聞て。林冲に對ひ。林冲汝ハ禁軍の教頭なるになどて法度を辨ず。利刃を拿もて節堂へハ入りける。これハ是該ト死的の罪犯なりといふに林冲が告りけるやう。小人

之末麁鹵的軍漢なりといへども些の法度ハなどかしらで擅に節堂へ入べき。これハ前月二十八日。妻とともに嶽廟に詣つる折しも。高衙内も又彼廟に到り荊婦を把て調戯しを。忽地唱退つ。次後又陸虞候陸謙をもて。小人を賺し出。街上に誘ひて酒を喫せ。又富安故に荊婦を騙て陸謙が家の樓上に伴ひ往て調戯しを。小人速に赶去て。陸謙が一場を打砕て。依びきこのかた既に両度に及び。彼終に姦をなし得ざりしが。人みなよくしるところなり。しかるにきのふ林冲ふと圖この剣を買たるを高太尉きこしめして。今日両箇の承局を遣し。彼剣を人に見んとて喚びよせたまふよし申すにより二人ともに来りけるに彼承局ハ林冲を節堂下に儐き。太尉に報さんとて退出ゆきしが。想ハざりき高太尉外面より入り来了。計を設て小人を陥害んとせり。望らくハ恩相。小人が爲に做主なりたまへかしと申せしぞ。

林冲寃枉ヨ
開封府ヲ
發下さる

府尹ハ林冲ガ詞をよまをり。まづ回文ヨ押了して高俅ガ幹人ヨ人一面の枷
杻をとり出て林冲ヨ枷させ且く牢の裏ヨ監下りり。さて私ヨ林冲ガ家裏ハ
ゑづ〳〵飯をもり素〳〵錢を使て。林冲ガ丈人張教頭も買上て告下ス
顧ひれを赦ん〳〵そこ〳〵ヨ當案孔目ヨ孫定といふのありりそのくせなる
頗直ふして十分ヨ吉を好て只人を過全んずを要せり。こをりく世の
人ヨ〳〵孫佛児ところび做つこの孫定明白ヨ這件のこを知道こつを
ヨ府尹小就裏を說き〳〵せ一日又禀てやう。林冲原罪あるヨ〳〵ガ。
やこれを過全ヨ人ヨ〳〵といふ府尹ハこ。彼ガ這般の罪犯ヨ於ては高太尉
批仰〳〵その罪を定む。孫さ〳〵ヨまヨ利刀を含ヨ居〳〵。節堂ヨ入れ
む。なり〳〵過全ガこ〳〵といふ孫定又禀てやう。この南衙開封の府い朝
廷より達おきまりヨあ〳〵ガやこをヨ高太尉權勢ヨ就せ人小小の罪

犯あるハこの開封の府ヨ殺来て。殺〳〵便剛アせんとまり這里ヨ彼
ガ家の官府なるハちこ及ず。今朝廷の法度ヨ仗ガ罪なき人
を殺〳〵ものいふこ。ものいふこ理あれハ府尹ヨ思つ。ちうハバ
いこ斷遺せんと。ヨ孫定答て。林冲ガ詞をよこヨ罪なきこヨあきこ
なり。ちれども兩箇の牟局を含ヨ居るをり〳〵こ〳〵證据とすべき者
なし。只その利刃を懸〳〵節堂へ入りこを罪とし背を杖こ二十ゆして。
刺〳〵遠恶の軍州へ配〳〵ものと禀せこ府尹やくうけ引こ。こづ
ら高太尉の処へ到り。再ニ林冲ガ詞のおりむきを禀說こ私ヨ高俅も
これヨ理なきこを知れハ強こ殺さるヨを得ず。ともかくもと應さるふそ府
尹ハやこ〳〵立こ人こ。聽ヨ陞林冲を呼出て長枷を除て。脊を打
ヨ二十杖そのち文筆匠ヨ命こ彼ガ面頰へ刺させ。地方の遠近を量

て滄州の牢城へ配すべしとよりて當廳林冲を重七斤半なる團頭
團頭ハ非人頭のことなれど鐵葉の護身枷を打て封皮を貼まゝ二箇の公
人命をうけもろり監押して彼列へ啓程せこの防送の公人両箇ゞ名を
董超薛霸といふ彼ハ既に一道の公文を領てゝ林冲を押送て當日開封
の府を出て兵ゝ是ハ衆多の鄰舍并ゐ林冲が丈人張教頭まで府の
前まありてこれを接著林冲と両箇の公人を引て別橋の下なる酒店に
到る孫孔目が維持ゆゑ打ゆ棒ゆ身をも毒らぎれい林冲幸ゆ走り動く
ゆを得ゝさて張教頭ハ酒保をまゝ酒肉に安排せ両箇の公人を
管待して盃の数もくさありてのち銀子をとり出て彼二人に送りけゝその所
林冲ハ張教頭に對ひ泰山今上に在せ今茲いかなる年月日なれぞや
高衙内に撞ゝ屈官司せられ人ハ今日一旬の説話あり

もられゝ泰山沼〻小人に鐘愛の令嬢を嫁せ既に三年を經られも
児こいふものあるゆかりさハいへ年未面を赤めゝ爭ゝもなくりしまこの
楼事ふ想つぞも流配人となるゝ露の命も定つなきをゞ妻家ふ
あゝきハゝ穏なりまぞ且ゝ高衙内威をゝ逼べ況その書
春あ月小きに林冲が爲に前程を誤んハいとをしくこそおぼえられで
小人主張あゝこれ他人の逼迫のまるあぶを周ゝ月今一紙の休書を立
てゝこれをまゝ改嫁せ耶爭執まゞかゝ是ハ林冲ゝゝも安く却て再
び高衙内に害せゝゝゝあゝ張教頭ハ人を貧婿いふ
まハかゝ虎言を宣まゞやゆ天年齋ゝゝこの横事に遭めれゝゝ
ゝふ犯せ罪なゝねハ今日權且く滄州に赴きゝ穴に躲難を避に
かゝゝ皇天憐見ゝ早晩獲佑ゝゝ人ゝまらんその財に妻完聚ゝいふ

八十萬禁軍教頭
王子其名
ヲ呼ブ
八十萬人ノ
將ニ不正
依而呂青
王ノ…

娯しのぶべきなれ又世の過活あれば明日より女児と錦児を子として。不揀怎的二五年養育すいと易しこと高衙内がいろぞうり逼て女児を求ふ〜もうひ引べうも思はざる事ニ糸ゴウ子の上よあれば此子滄州の牢城ふ到りしもこれ又書を書て衣服を送ふん只憂るハ牡鹿の角ハ束の間うてあるべきれば。かゝる胡思乱想ふせそ。言を竭して慰るふ林冲ふ云ハ

いくらハ泰山の好意感ずるふあるほあまりあまりてとりもう隨意なしあるはさハ此もしも目をハ瞋ざるしいふ。もしれども張教頭ハとうゝゝゝ肯セず。衆の鄰舎もさハ去まひそと諫るを林冲ハをうちふりこの子肯し

あれしなふハ假如見されゝゝ妻ふハ見えゝやゝと誓を立て推辭しふ張教頭もせんすべふ。志うふハ心を安むる爲ニ休書を

あゝうおゝべゝすやいゝゝむを経ようもう女児ふ改嫁せハ親子

情願もゝちなんゝゝ。俄頃ふ酒保をゆびゝ。字文書的人を尋まさせ一張の紙を法ゝ。かゝゞ字ふさせゝうる。

東京八十萬禁軍教頭林冲爲因身犯重罪斷配滄州。去後存亡不保有妻張氏年少情願立此休書任從改嫁。永無爭執委是自行情願即非相逼恐後無憑立此文約爲照年月日。

と書をゝりゝふ林冲ハいゝゝ打斗ゝゝ腕も自在なゝまで。ふゝふ五年月の下へ花字を押。又ふ摸今ハ和俗ふ形とゝるこれ ふ根ゝ。を打ゝ。これを泰山ふ分ふ示ゝ祈しも林冲ふ妻ハ只天ふ嫁地ふ哭き。女使錦児ふ一包の衣服を抱著させ。酒店の裏ふ尋来ゝうゝゝこれバゝゝへばかゝゝまゝゝふ。かゝり果ゝ法ゝゝき夫のほゝりふみまるゝ。流涙ゆゝ身の柵となるゝもなし

別を決して林冲休書をこしらむ

世をうゝむ涙は泉の涌ごとし。林冲も今さいはゞ公よりてはと思ひ回し妻
ゐ對ひ〳〵いとりのみやよりの妻いとゝ歎きそれ今屈ゆみあしを濡
川へ赴くなれば生死も弗保ぐたゝりを限りの縁あゝと思ひ好頭腦ぐる
あるなりゝ招るも嫁ともらるゝ就まへ休書もこゝゐありうゐゝさし
も林冲を等んとも思ひまひそと仇もをりゝぎ妻はあほいよ〳〵哭ゐ〳〵声を
惜ざ且くして頭を撞ゆえぬ夫の言語ふ。ゐ身を点汚ざるゆはよ〳〵知
道ゝおゝあゝゐいゝぐかゐゝき別路ふ休すんとは公つよ。このゆんゐのみ
宜ふもうけ引は行るまゞさそ仇ゝせんと身をゐゝぐゝ泣さへあるゝら
林冲もとゝゐと思ひて又いゆゆこはあゝゝゐゝゐのれ形せざれは日後ふ
去下ゐ身をも悔つゞゝとゐ公のつゐゐはいと汚ゐるゆゝといひ勸れば張教
頭も西の瞼を去ゐゝき。ゐ児ゐを放せよ。是は林冲ゐ肚裏よふゝき主張

あるゆそゐれ又は身を嫁せまゞ。身を仇るまゞ盤纏はこゝろを添ゝ仇さ
せんとゐひこゝらくゝ引ゐる。只是荊山玉損ては惜へ〳〵數十年の結髪其
親も做ゝ〳〵。宝鑑花残狂ゝゐ九十日東君の匹配を費せり。嗚呼彼小園
昨夜の風ふ紅梅吹折られゝ。地る横ゐるゆ異ゐふゞて妻は忽地胸ふゝゐり。
声絶ゝ四肢も動ゐゞ仇ゐて死せるゞゝゐ其ゐ林冲も張教頭も連忙て
扶起し。救ゐるゆ半晌ゐゐりゆ〳〵。ゆゆ〳〵醒〳〵れど只ゐ元としゝ哭休ゞ。
かゝゝゐあゐべきふあゐゐされば林冲は休書をゐりゐゝも泰山よふ付〳〵。衆此
鄰舎へ林冲ゐ妻子を扶攙遂ゆ酒店を立出ゐは張教頭はゐゞ〳〵林冲を咽
び〳〵ゐゐゐ。ゐゐ增只前程を顧〳〵。回来る日を等ゐ人は身ゐ家の老ふはゐゐ。
引〳〵養ふべゐれば。ゐゐ〳〵ゐゐゆかゐゐゆなゐゐ。便人あゐば書信を寄せ
ゐり〳〵安否をゐゐて〳〵。老のゐり言ゐて〳〵ゐゐ。ゐゐりを〳〵げよゐえゐれ

だ。林冲さうの言語もなく。伏拜つて衆の鄰舎みも別を告げ。包裹を背み負ひ。東西よりうれ去ぬ。

○魯智深大ゝ野豬林を鬧す

防送の公人董超薛覇の両箇い。林冲を使臣房裏ゑ帶おきく。監子寄りおのくまぐ家ゑ立入りく。行李の收拾する却しも。ちゝき巷口なる酒屋ゑ酒保。董超が家み来く。董端公只今二位の宦人小人が店中みおいて。急ゑ見えまゝ。せなんと宣ハさまゝみ誘ゑ入ゝ。いふ董超はなく。そハ誰なふ人と問ば。小人も何人ハ認ふねど。只端公を望びくよと宣ふ所よりありて。いふ今董超を端公とんまづるハ宋の代み公人を稱してまくく端公と云へば。さて董超い酒保く。も彼酒店の園児の裏ゑ到りく。ゑゑる一箇の人ハ頭巾を戴。身みハ阜紗の背子を穿て。下面ゑ阜靴淨襪を穿。董超を見く慌忙く出むえ端公さまづこまくくて席を清ゑ。董超が言ハ。それ〳〵いまづる顏を認らぬ。そも何人よおいまして。甚の使令ぞ。ひとゝ彼人又いふ。〳〵もあまづゆゝやうみ性ゝ人。ゑハおのづゝ。ちゝ〳〵ふ時酒保ハ許多の酒肉を擺び。まゝ。一ッの阜ゑ擺ゑ。ゝ。彼人又董超み對く。薛端公ハいづれの処ゑ位しまゝ。官ゑ董超答て薛覇が家ハ前面なる巷の内ゑ。ゝと回答をゝ彼人ゑ底脚向てく。酒保を望び。汝ゝが爲ゑ薛端公を清未ゑ。ゝハ酒保ハところを得く退出。ゝ且く。酒保ともゑ薛覇も園児の裏ゑ来ゝ。迎ゑ董超ハ薛覇ゑ對ひ。この官人ハ今我們を望びく。說話ゝ宣ひしゝ。ハ分ゝ来ゝを等く。いまづこの〳〵ハ彼人ゑ礼儀を舒。さてその名字同じ。彼人ハ只微笑く。あゝハみも告ぞ。少ゝ

ばかりせやべー。ゆど酒を喫る人とて。二人對坐して數盃を傾彼人袖裏より十兩の金子をこり出し。阜の上に放在。二位の端公おの〳〵五兩を收めて些の小事あるまでとこゝに二人いとの光景をみていよいよ小人素寒官を謁ぐるよ。何るのおいーまーこの金子を賜りいそこと同時に彼人声を低して二位に彼林冲を監押して滄州に投ずるあるまでやそれに付て人〳〵高太尉腹心の人陸虞候陸謙なりといまだ名告もせざる董超薛覇に只喏〳〵と回答して。俄頃に言語を更て小人に対する人もいひねに對坐して礼をいたせり。恐〳〵と倍話して陸謙に耳語せり。扨の林冲に太尉の對頭なるを知りて今高尉の鈞旨を奉者この金子十両を二位に進ぜんなり。かたじけ

くゆくに及て僻静去処にて。林冲を結果。結果を佛語なり。路にて病死せしといつわりて滄州より回狀をこゝに討ぐ〳〵分付してよろしく討ひるべし。只顧些のこゝありとも。太尉にこゝ。開封府にて。扨こゝを董超一切こゝ引ぜ開封府の公文に只林冲を解活的とこそいひあるをいなれ。且本人の年紀。壮にして。力も健なるものをいく他的こゝ塊答あるべいこゝ。せんと陷めば。薛覇にこれをもあくまで。董超にこゝ言をゆるく人今高太尉我們を殺さんと宣ふも。脱るこゝのはる難し況この金子を賜りこゝ。こゝを委ねるなるこゝの人情を破らば。照顧しこゝ。前頭の大松林猛悪去処に到りこゝ。彼を結果人は容易くといひこゝ。彼金子を收めつ。陸謙に對ひ。官人公を放しこゝ人公〳〵は五拾貫少くは両程にて。分曉らせやさんといふに陸謙大に喜びこゝ。薛端公却真に爽しこゝ。

李白醉眠楷壁上

劉伶仰臥畫床前

黄金を投ず

陸謙公人を誘ふ

夫陰門有

ゆをなし果るべ林冲が臉上のはを剛彼金印を掲取り表證となし
もらふべこれ又包袱に別に十両の金子を進ぜべし。うるぶぶと涙のふるよ好
音を等ふといふ原来宋の代の成敗は。犯人を流配もしきは臉上に刺字して
するこもそを明白に黥しとふとさいそのく腹にもうむ方よ金印を打とえ
いと。かくて三人は一會の酒を喫了て陸虞候酒銭を算了てこなりつさよ
酒店を立出むのがまるみくへりにさるに孫に薛覇は彼金子を董超ふも分
与まづ家ふ到り包裹と水火棍棒用心よを奴まに使臣房裏ふ来りて。
林冲を監押して董超とともに上路し。當日は城下を離て千里ばかり。
歇りて宋の代ふは囚人を監押する公人の歇て宿房銭をとりぞそのの夜
董超薛覇は林冲を領て客店ふ一宿し次の日天明に打火て飲食をして。
滄州の路を投ていそぎしが時は六月の天氣ふて。炎暑堪がたし。林冲は

め棒ふて打まくれば。痛もつよくさてしは一両日大暑に路を走り
しが。棒瘡大に發りて。敢て自在に走り得ず。董超これをうんていさ唱り。
汝いうるれば路を曉ざる。今滄州へまだ二千里あまりの路程あるを。かく慢
地と走りてはいつの秋に彼地に到らん。とて走れといそがるるに林冲
いふ。小人前日棒に打まれ今更棒瘡擧發して歩もせんすべなし。
いかる炎天に上下の歩をとめとりいふに言語もあらぬと打ちはまれ
これば薛覇これを見て汝ぢつ慢地と走れ。咭咕を聽ざるせこといひ
て行は董超は路をぢ。喃く咄く的口の裏ふ。埋寃日もや西ふ没んとする
ころ。二箇の人ある村の客店ふ歇て董超薛覇は棍棒を壁に倚かけ包
裹を解下せば林冲も脊負ひ来りし包を下して彼が口を開るまで
包裹より呼持の碎銀両をとり出し。店小二を央ひて。些の酒殽。些の米と

を買ひ。盤饌を安排し〻董超薛覇に喫せ。それもうち喫く。枷をかけらるゝまゝに倒丑引しりぞく。その時薛覇は密に一鍋の百沸滾湯を提来りて脚盆の内に傾在林沖をまぼび起し〻いふ。林教頭汝脚を洗ひ〻睡いへといふ。林沖これをみて。やゝ身を起し。かゝ枷をうけられ〻いへば身を曲ることもなりがたし。只このまゝ睡いんといふ。薛覇又いふ。もうぶがるれはみまろ〻〻洗ひもうさをべし。とゝへまゝて招ども。林沖はうは推辭し。敢従さりるを。薛覇は只顧とれをまてめ。旅さるりの常なるに。のゝ苦うゆへき。こゝてが好意をゝといふ。林沖はこれを計ども必ひうけさるべ。会礼は饒恕し。とてひつ。やゝ脚をさし伸るを。薛覇はもとゝ引捆し。滾湯の中へ井と入れば。林沖一声哎と叫び。急に脚を縮し。忽地脚皮紅に腫あり。終堪がたし。薛覇は声をあり立て。罪人の公人は伏侍するをはなれ。走るを汝は驕りるぶり〻冷を嫌ひ熱をきらふ。

乞いうなる道理ぞやと罵るを。林沖は回話もせず。舊の処へ倒引しぬ。〻両箇の公人は彼滾湯の水を潑脚を洗ひ〻睡り〻ぶ。四更のころに到客店の人もいまだ起さるに。薛覇はまづ起〻面湯を焼し。打火し〻董超〻もも飯を喫し了て。林沖も起出し。祗ふ喫るものを。又走り動くるもうるさ。薛覇はいざうち立んと〻〻。水火棒を引提て。林沖を催促さその間に董超は新しき草鞋一雙を解おろし。耳朶索児を麻り〻編これを林沖に穿よといふ。林沖は脚皮さぐ〻。潦漿泡となり〻ぶがる。草鞋を穿んとて。彼首此首を索れども。那里へとり捨ん。〻〻て〻へ〻ざれば。いうもともせんまぐなく。この新しき草鞋を穿て。客店を立出れば。いまだ五更ふかるさりるに。かゝて林沖は僅二三里わして。脚上の泡を打〻き草鞋

薛蟠滾湯
林沖が
足を洗ふ

不破られ。鮮血ながれ出で走り動もを只管声喚く止ざるを。薛霸ハ跟より棒を揚げ〳〵走ぶ〳〵。走て〳〵走ぶ〳〵この棍棒を喫まべーと罵る。林冲い〳〵苦しげ〳〵。小人怠慢〳〵あふねぐも。実ハ脚疼く。一歩も運動ぐ〳〵ふといふ。董超つ〳〵この光景を見て。げらさそあ〳〵めれ。汝を扶け走ぶべし。ぶ肩をかりるべくとて。やがてを挽腰を押。又四五里来て〳〵只これ一の林子あり〳〵。その名を野猪の林とよべり。この処ハ東京より滄州ハ至るまで等一の嶮峻去処ふぞ省る。この宋の代ハ些の寛離あるものハ銭を公人ふ与へ〳〵。這里ふて人ふれを好漢を結果て〳〵おほう〳〵と。今日彼両箇の公人も林冲を帯〳〵との林子の裏ハ走り入り。董超忽地いへりるハ。あまり夜深ハ立出られぬ。ふ今〳〵明るを。あれを少刻とのところふ〳〵歇べーといふ。薛霸ハこれふ従〳〵。三人行李を解おろー。樹の根ハ搬び在林冲ハ一息呼と

つき〳〵。大木の株ハ靠著遂ふ仆ぶ〳〵ふ〳〵び起て。董超薛霸ハ色をえ〳〵。一歩行ハ一歩等。倒れ〳〵又ろ起ん。これも殆困倦〳〵。さふ〳〵ハ一睡いさんとて。水火棒をまぢ〳〵放在。ふりもも睡〳〵ん〳〵。ぶ二人忽地眼を開くふぞ。林冲いと怪〳〵。上下なぐて睡まんざると。ハ二人答〳〵。我們も睡べうおもへ。這里ふハ関鎖もを。只管走り来んるを怕〳〵。ふを放〳〵睡〳〵といふ。林冲ハ〳〵これも是一箇の好漢あり。縱上下姑睡〳〵ふ〳〵。脱去るるハいかーといふを。董超ハ笑〳〵。さハいへれハ信とせど。縛〳〵おくぞふハ。ふ事ともなるべーといふ。林冲ハこれをも推辞とかーまで陪思ひ〳〵。とも〳〵計ひ〳〵。癒まれハ。薛霸ハ腰より一條の索子を解下し。林冲ふを連脚を帯。枷ともも筭〳〵的縛〳〵。樹ふ繋ぎ住。二人爵〳〵水火棒を引提つ。林冲ふ對〳〵いふ。これ〳〵ハ私ふ殺さまあ〳〵前日

京師を出ることを。彼陸虞候陸謙が高太尉の鈞旨を傳へ我們両箇に分付して。こゝ〳〵密々汝を結果金印を掛来れと。只顧托こゝ〳〵を得ぞかくの如し。汝のなんぞ我們をらんとするか。只死數こゝ〳〵より明年の今日はこれ汝が周年なり。憐べし〳〵その日限を定られ太尉ときこゝ等まつめ覓期せよ〳〵ひとをあくまで既に打人と前に向へ林沖今はと忍ひ〳〵えしらぬ用言語を和げ〳〵いまゝ上下と小人は往日些の讎もなく。近日又寃もなし。只救ひたまへ。生〳〵世〳〵も忘れはせじ。喃〳〵いまを。もゞを。董超薛霸は左右に立めぐり。汝間話を休よ。これは汝を放べきもぐを。とぞといはまきつゝ。水火棍を怒て起る。林沖が腦袋上を劈將より打人をも痛しいかなる豪傑只まを束〳〵死地に就く。正に是萬里の黄泉旅店なり。三魂今夜誰が家に落らんとぞ。〳〵あれあり

○柴進が門に天下の客を招く

當時董超薛霸の二人は棒を挙起る。林沖を打殺さんとを。浩然松の樹に背後よりあるいて雷の鳴ごとく。一声高く呼るとゝ。鐵の禪杖飛將來り。忽地両箇が棍棒を一陌に丟落し。俄頃に一箇の胖和尚脚踏あしゝ走り出れ林子の裏にあり〳〵。汝が計較を。〳〵とぞと叫ぶ。西箇の公人大に驚き彼和尚をよく〳〵これば。身に皁布の直裰を穿く。腰に一口の戒刀を跨こ禪杖を提起〳〵既に二人を打人とする射。林沖纔に眼を見開べ素認ぬる魯智深なり。こいつはと喜びつゝ忙〳〵住〳〵いまゝ。師兄彼を打ぬひそこれ今説話ありと叫べ魯智深〳〵擅に打ぞ。ゑは眼を瞋し歯を切り。や〳〵杖を住〳〵両箇の公人は呆れに呆れて活るこゝちもなく。林沖ふたゝび智深に對ひ。今日のゑは彼二人が対に干るまもあるまで高太尉

魯智深
義を仗て
林冲を
救ふ

陸謙をり〳〵。二人を分ち〳〵。林冲を殺さんと計り〳〵ふ。彼おもなどう侯ごん。
さるを両箇の公人を殺〳〵もらで。これ寛屈なりといふを魯智深こづ〳〵ふ怒を
ちのひ。禪杖を投げて〳〵戒刀を拉出し〳〵。まづ林冲が索子を割断く扶起し。
教頭ゆ。那日刀を買ものの時より是〳〵よりまべてのりを走るいべるも故ふ
べきようもなく。既に滄州ゆ流配されもふよりびと〳〵當るれも開封府の門前
より到る〳〵尋〳〵ぐ行ちがひん終ゆ逢ぐ。走るよ人のいふを分が当使臣房ゆ
在り〳〵と紀酒家保が両箇の公人を呼びむく。店の裏ゆハ一箇の官人酒食を
安排〳〵これを管待〳〵。ゆるゆやん耳語あひ〳〵告るのあるよりて。
見るゆよ路ゆ〳〵教頭を結果人のゆなるべ〳〵ところ分跟来りて両箇の
撮鳥が摸様を窺ふ。ぶとるゆ紀ゆのなれハ密よおるべ〳〵客店ゆ歌ゆ做
神做鬼まるを闕窺まべ。ゆゆを賺〳〵滚湯ゆ脚を破〳〵せ。今又こふ

誘ひ来る〳〵。情なく殺さんとすれ今この撮鳥が頭を打く碎く微塵よあき
さんハいそこの熱腸を冷さんといまさ紀あく〳〵罵るめそ。林冲いとれを勧めて。
師兄これを救んとあるべこの二人を饒〳〵くるくまぐくるひこらゆわぐ。
魯智深両箇の公人ゆ對ひ汝この撮鳥まべ〳〵剝ゆて肉醤〳〵まべるれぐも。
ゆ兄等の面皮ゆ看る〳〵饒ぞ〳〵いひつ。戒刀を室ゆ挿又禪杖を含ゆて。
やゆ撮鳥ぐも。歩く教頭を扶掖るれゆ後ひ〳〵まれといひけ。前ゆ立て林
子を出るゆ董超薛覇いふ〳〵怕れく。そうぐ〳〵回話もせぞ。教頭小人を
救ゆ〳〵叫びるべ。包裹〳〵水火棒を提林冲が包をもろりてこれを脊
負ひ。四人斎〳〵林子の裏を走り出。ゆ〳〵ゆ三四里ゆ〳〵村口ゆ小ゆ。
酒店あり〳〵べ。四箇の人いこの店ゆ坐ふひ魯智深まづ酒保をよびく
五七斤の肉と酒を沽ひ。又麵を回せ〳〵打餅〳〵。これを林冲ゆ喫せれも

酒を飲なゞさてゝる。董超薛覇ハ智深ヲ對ひ〳〵。師父ハ原那里の寺ヲ住持志のふいまゞ法顔を認ふまゞひとゝ〳〵魯智深冷笑ゝ。この損鳥ども。ゞ行処を問〳〵伺ふまる立くり〳〵高俅ヨリ上ん烏欲他人ハ彼を怕ゝとも。れハ者ざるも怕ゝまゞ。れす〳〵那廝ヨ撞著べこの、三百の禪杖を喫まゞべきゞ〳〵罵れハ両箇の公人いよ〳〵怕ゝ口を鉗ゝぬ〳〵びいるゞ些れ酒食を喫をり。おの〳〵酒銭を還ゝてこの酒店を立離まゝハ林冲ハ魯智深ヨ對ゝ。師兄ハこれより那里へ赴きるふと冒べ魯智深答て人を殺さべ血をゝゞべ〳〵人を救ハ徹をゝゞべ〳〵。これ直ヨ教頭を送ゝ〳〵滄州ヨ到らんとゝ。両箇の公人ハこれを伺ゝ〳〵苦〳〵〳〵ゞゞとゝ〳〵ゞきふなゝ〳〵ねハそれゞまゝ〳〵爭まゞ。只この和尚ヨ打ゝまんゝを怕ゝ魯智深ハ歌んとゝべ便歌行んとゝハ便い〳〵。り〳〵聊もその意ヨゞべ或ハ罵られ。或ハ打ゝ

極ヨ。董超も薛覇も声をゞゝ高くえゝせず。更ヨ和尚の發作人車を怕ゝ。次の日一軸の車を討ゝ〳〵。これヨ林冲を扶のゞ〳〵。二人その車を推ゝゆきゝ〳〵極ヨ只顧鬼胎ヨ懷着。幻を小ゝ使ゝ〳〵。奴僕ヨ異ることゝ〳〵。只その性命を保んゝをおゝふ外他事ず。魯智深ハ路ゞ〳〵酒を估ひ肉を買ひまゞ〳〵林冲を將息せゝ〳〵。両箇の公人ハも些をゝゝち喫せ客店ヨ到ゝまゞ早〳〵歇ゝ暗ヨ行董超薛覇ハゝゞゝ打火ゝ飯を做まゞ魯智深〳〵林冲ヨ供ゝ。おのれハ後ヨ喫ひゝるゝをゝを行ゝるゝをゝを一日両箇の公人暗ヨ商量ゝ〳〵ハ我們彼和尚ヨ監押せゝれゝまゞハ。ゝゞびゝまを下まゝるゝゝまゞこのゝ〳〵ゝゞ東京へ立ゝゞゝゞ高太尉ヨあゝゞゝゞ怒りおゞゞゞこのゝいゝゝせゝゞゝいふゝ薛覇志ゞゝ尋思ゝてゝれハ大相國寺の菜園解宇の裏ヨ新來の僧人を魯智深とよゞふ彼萬夫無當の勇ありゝゞ。今

の和尚は魯智深なるべし。我が京師へ立入らば、只その實を告げ、この和尚を護送られば、林沖を殺し、ひたすらに禁錮し、前よりは今その還しを禁錮し、禁錮的和尚を尋ねさせ、その分の乾淨を求めさせんいうよりは、董超も說得るに是と同じつ。二人暗に商量をぞ定るかくて魯智深は林沖を護送りゆくの十七八里ほどもなく、滄州へは七十里あまりの路を過ぎて纔に一日路なり。これより前はまだ人家建つべき僻淨処もなしとぞ。魯智深はその實否をもゆ定るに、少く松林の裏に歇こ林沖を對らいつる。教頭これより滄州へは遠からぬ前路さぐる人家あり。太公の和尚を待定むるこそ、これ別れまうさんとぞ。林沖は魯智深に銀子を收ること。既に別れ去りんとまうす。魯智深こそ、ぜひ住め。汝両箇の撮鳥がひの硬さこそ。この松の樹に似ること。同じ二人答へ。小人が頭にこれ父母の皮肉なれば、些の骨は輪起く。彼松の樹を下ればこそ、二すあまり折れ、地撞く倒るるに魯智深禪杖を振ひ、汝が両の頭も又この樹と一般なりんとぞ。遂に

とり出して、林沖に与へ、又二三両の銀子を両箇の公人に与へていはく。この西の箇の撮鳥がひの頭を砍るべし。汝両箇は路を去れば、今より路を生ずるなり。彼地に送りゆけよ。二人の両箇は口を斉しくいはく。僻淨なる高太尉の差遣るれば、一旦さんとうらひつ。魯智深こそ、ぜひ住め。汝両箇の撮鳥がひの硬さこそ。この松の樹に似ること。同じ二人答へ。小人が頭にこれ父母の皮肉なれば、些の骨は輪起く。彼松の樹を下ればこそ、二すあまり折れ地撞く倒るるに魯智深禪杖を振ひ、汝が両の頭も又この樹と一般なりんとぞ。遂に

松を折て
魯智深
董超薛
霸と懲す

漢國ノ今ノ潼關ニ東京ヲトンモ北京ヲ北京ヲ水滸傳ノ梁山泊ヲ名付ケタル所ニ

林冲ヨリ別を告舊の路へ入り去りぬ。董超薛覇ハ舌を吐頂を縮て動もせず。林冲ハ二人を又入り。誘ひ〳〵べ〳〵と行くに。両箇の公人ハ身を起し。げに莽〳〵和尚なる。只一打にこの大木を打折るに。人間技ハあらじと いふを。林冲うち笑ひ〳〵。うそうのゆへ驚くに足らぬ。彼和尚寺にありし日。一株の大楊樹を連根拔ひし。と話〳〵るに。二人ハ聞て。怕れて。遂に這里を立出て。ゆ〳〵と晌午のころに到り。官道に一座の酒店あり。ぶむの〳〵店の裏に。董超薛覇ハこの半日纔に自在を得たり。さて店の裏に。二五人の酒を篩小廝。もとより忙〳〵脚を乱し。東に搬び西に搬ひ。林冲ハ二人を顧ず。林冲あるに従て。卓子をうち敲き。汝ハ何ものぞ。客を欺く。いつまでか。てゐ〳〵縱れ犯人なりとも。這里の酒を白喫あるべき。これいふある道理ぞと

ほのめかす。主人ハ生来。原来この人我的が好意をまつ〳〵ざるこをといふ。林冲ハ〳〵。ここにも飲ぬ酒を沽んといふを責ず。甚の好意あるんといふに。主人又いふ。汝ハ〳〵やこの村の中に一箇の大賊主にあり。姓ハ柴。名ハ進と。人ハ〳〵てこのあたりの人ハ。柴大官人と稱し。江湖上にて小旋風と呼ぶ。祖ハ大周の天子。柴世宗の子孫なり。陳橋位を簒りてより。太祖武徳皇帝勅〳〵。折言書鐵券を賜り。〳〵人を貴重ぜるに大きなるもの。この人ハ〳〵往来の好漢を招き。家に養ふ。三五十人に及べり。又常に〳〵店に囑付て。流配の犯人来ればこれを莊院に投来せよ。これ多くの資助をくれと宣ふよりて。今汝に酒を賣らぬ。汝〳〵喫て。面皮を紅にして到らば。彼〳〵盤纏ありとも。〳〵資助ハ志なへ〳〵。是〳〵好意にあらずや。と首尾を說をれば林冲ハ両箇の公人

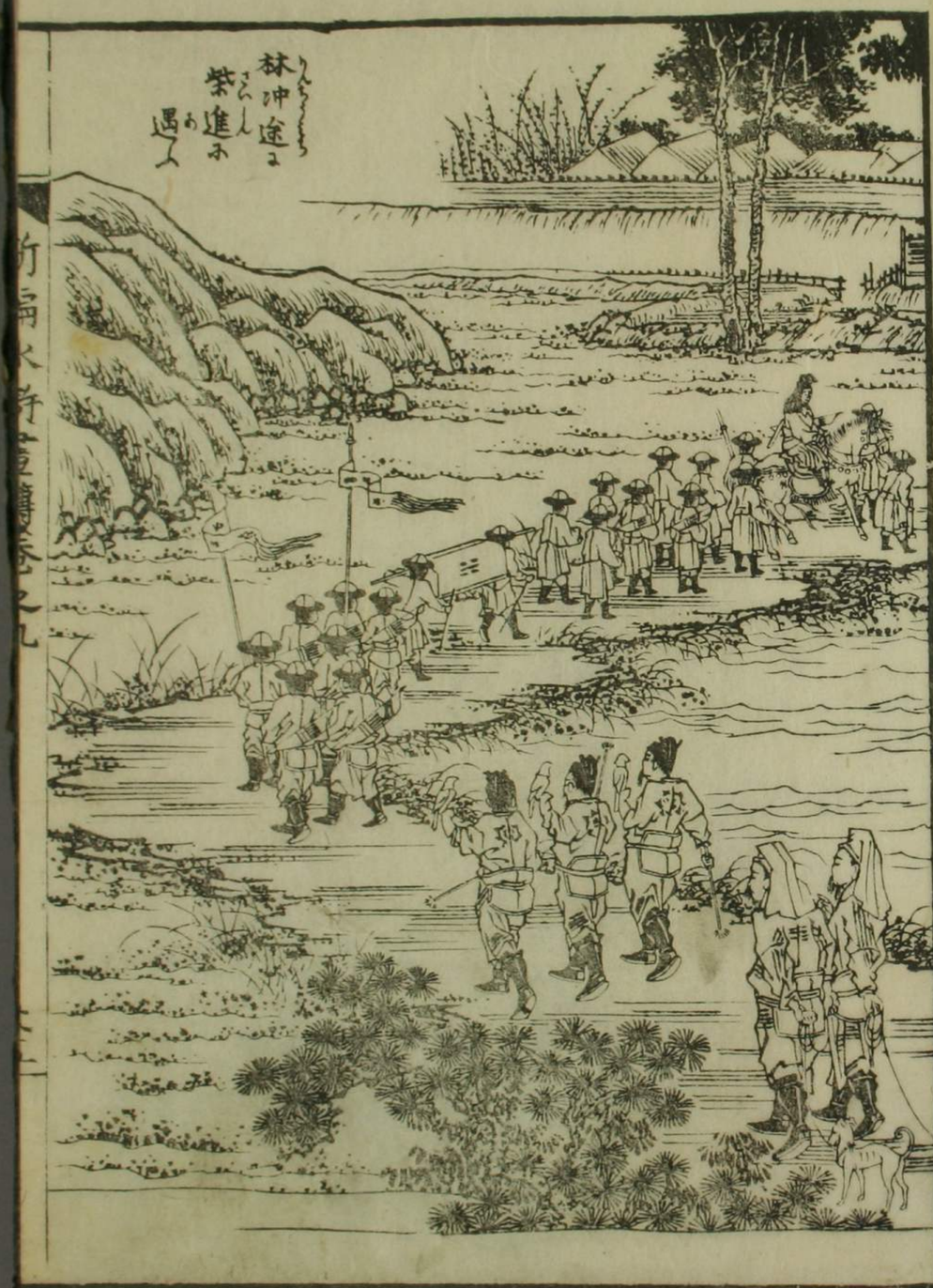
に對ひ小人東京にて軍を教へる時。人あり柴大官人の名を稱するを聞り。誘彼家に尋ゆきて人のうんやといふに董超薛覇も主人が物がたりをきゝ。かゝる大富貴の人の家に尋ゆんあれば我らはさぞと深思しつゝ。そもかゝもと癒しゝ。既に包裹を脊負ひなどする間に林冲は主人に柴進が莊院を問ば。この前面にあり。二三里（六町を一里とも五拾四里と稱するなり同前）あり。あれなる大なる石橋をこえゝば甚処より彼莊院なりとかぶりをして備細に教へ。林冲ホハ厚く主人に謝し門を出ゆくこと少許にして一座の大石橋あり。これをこえれば平坦の大路にいく株の緑柳大河の両岸に繁あり。四方築垣の中に彼大莊院甍をならべ南に門あり東に牕あり。九級の高堂三微の精舍奇麗壯觀いとゝもあるべき林冲遥に打望てこゝろうんと思ひ。いよ〳〵脚もいそがれ。澗ある板橋のこなたに来りぬ。

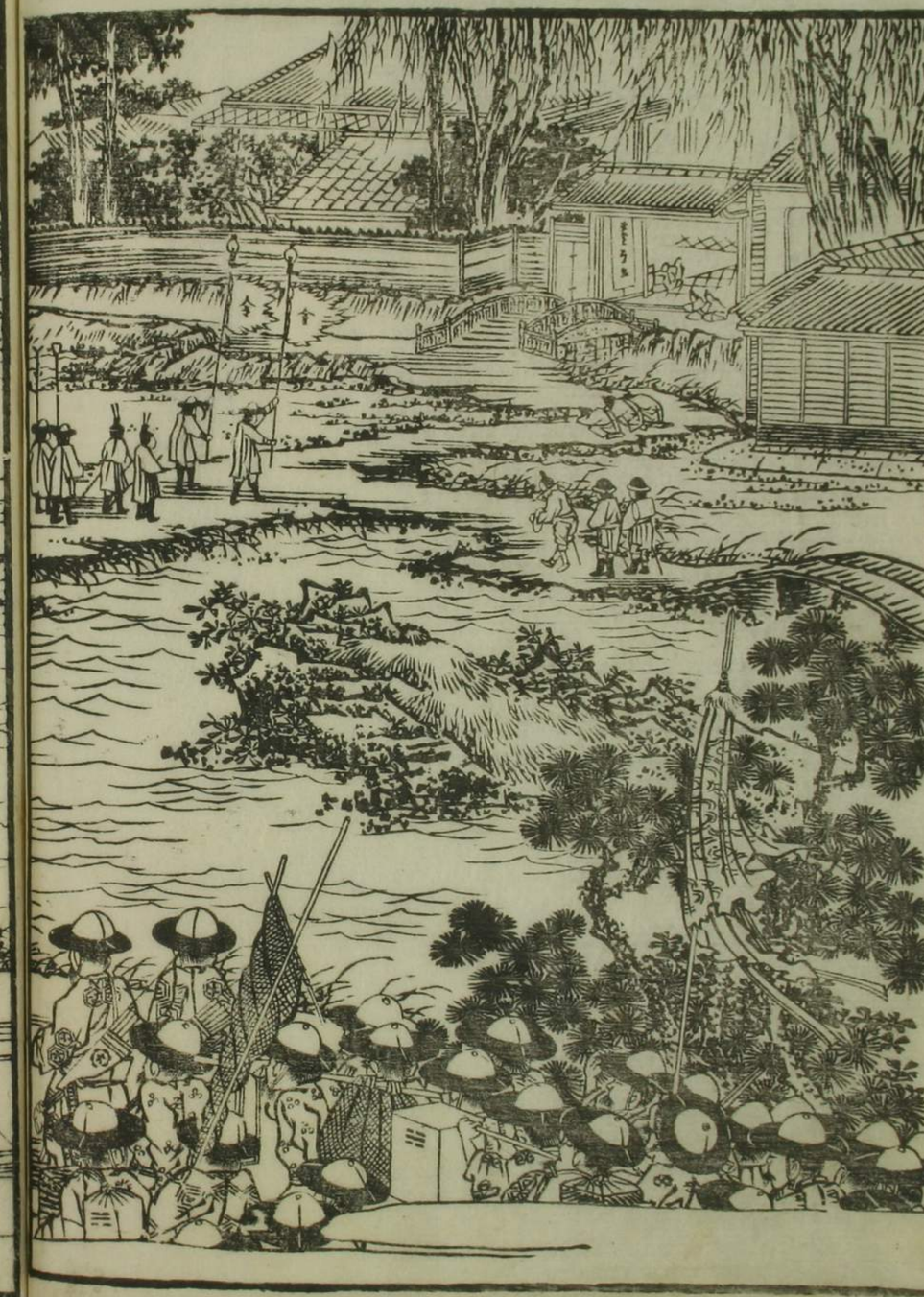
こゝに五人の莊客橋の上に涼み居たり。林冲まづ礼儀を舒ぶ。小人ハ京師の犯人林冲といふものゝ。このよし大官人に報知させ給へしといふ。彼莊客ホとれを聞ハ。今夜ハ大官人東莊にて歌ものゝ宴あり。いざ罷なんとて。両箇の父人ちらもと答ふるもちらもあり。かゝる時ハ實に福なり。いざ罷なんとて。両箇の父人はりゝ舊の路へ赴しぶ。ふゝ呑をうゝ。ゐひ〳〵。ゐの中いよ〳〵楽しかりし。ゐる纔ホ半里ばかりなる折しも忽地前面なる林子の裏より。一族の人馬出来り。その打扮いふとゝれハ。数十疋の駿馬ハ風に嘶ひ。両三面の綉旗ハ日ホ弄粉青氊笠ハ。荷葉の倒に飜るがごとく。絳色の紅纓ハ蓮花を乱し挿とそ。人ゝる箭を負ひ弓を含。戎ハ細大を牽。蒼鷹を擎既に間ち

豪傑を豪傑と豪傑を豪傑と真の豪傑と

くまなくうしろを見るに只これ一位の大官人白馬よりも躍り出て年紀は三十四五とおぼしくて龍眉鳳目皓齒朱脣鬚髯は細ふ垂れて衣服綺羅ふの裝ひ。まふ一張の弓を帶し一壺の箭を挿し。夥の從人を領して莊院のうへに到り。林沖はこれ柴大官人なるべしと思ひつゝ。いまだ問ふに及ばざるに躊躇してありけるを。馬上の官人馬を駐め彼が枷を帶して立在るを原いふるくそやと問。林沖これをみて。忙しく前に向ひ身を躬して答るやう。小人は東京八十萬禁軍の教頭林沖といふものなり。高太尉に惡まれて。開封府に發下され。今番滄州へ刺配さるゝ路なり。前面なる酒店にて賢を招き士を納ふ柴大官人といふ好漢の這里に住しまして便づとまりしに。緣淺くして經ふ見まで空く立うるふるといひつゝを。ふぐるふ彼官人馬より内と飛下りけり。小哥とその柴進なるを。今豪傑の來臨あるとうけたまはり。急ぎ迎ざりつるを。恕し給へと。

抹沖も連忙しく礼を答へて。柴進をいざなひて莊院に到り。莊客ホ大ふ門を開きこれを迎へ。さて柴進は直ふ林沖を廳前に誘ひ礼儀を厚くしていふやう。小哥教頭の高名を久しくうけたまはる。今日ふ到り人は平生の幸足りぬといふ。林沖答へて微賤の林沖かゝる貴人の管待を蒙るは。宿生の幸なり。罪犯ありてこゝに流配されあぶざりせはいでそれを掲ぐべきと回答するふぞ。柴進は再三謙讓。林沖を客中に請じ。董超薛覇を一代に呼せなどする間に數箇の莊客酒肉菓子餅を拔出。又一盤一斗の白米の上に十貫の錢を放在。まづ將出まりしを。柴進はこれをうけとり。教頭こゝに到るのひしをいでゝ。輕小の物を進ずるまづ快く將ゆきて。別に羊をとり酒を溫して管待す


林冲途ニ紫進ニ遇フ



為せよと命まれい林冲ぶいふ。天宦人小人は賜らんとるぶこれまてもの風安
しなぞうこの外を尽らんやと推辞れい柴進微笑〻教頭かゝるの宴ひそ
彼ホミる尋常の流配人なりゝ尽ひ〻てかゝいそうひらんやよ荘客ども。
そうのてゆきゝ引人来よりといそがし立れい荘客ハ命は違ぎして。別は酒食を
安排。既は盃盤賓主のまゝは列ま〻祖まものゝ主人は謝〻盃を執て更ま
数盃は及ひ〻ゝさ柴進い弓袋と箭壺を解去ゝ。ゝ〻林冲以下両箇の
公人ま盃をまゝめ些の間話江湖上の勾當まゝ説あゝ〻ふ夏の日ゆゝ
没なんとまるまゝ。柴進再び酒を添山海の珍味数を竭して饗を扨も
一箇の荘客走来ゝ。教師入来まるひ〻と報知ま。畢竟この教師をいう
なるゝ〻。〻〻次の巻を讀得てちんん

新編水滸畫傳卷之九　畢

一
西脚山谷中小池有
東西南北草花
夜半無風自波興
一月龍宮在水中